

大衆文化研究の拠点をめざして

『大衆文化』創刊準備号をお届けする。

二〇〇二年に旧江戸川乱歩邸と旧蔵書・諸資料が立教大学に帰属することになって以来、立教大学ではそれらの保存・公開はもちろんのこと、それらを核とした研究と成果公開の手段を模索してきた。その途上にあるのが、二〇〇四年の立教学院創立一三〇年記念「江戸川乱歩と大衆の二〇世紀展」の開催であり、二〇〇六年の立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターの開設であった。センターの開設によって旧蔵書の公開も可能となり、未公開資料の翻刻も『センター通信』の創刊によって緒に就いた。このたび発刊した『大衆文化』創刊準備号は、そうした流れをさらに促進すべく企図されたもので、具体的には、研究と翻刻紹介とがその両輪となっている。もともと立教大学では研究を乱歩とかミステリーとかの狭い範囲に限定するつもりは毛頭なく、科学やモダンイズム文化、さらには近世文化などにも旺盛な関心を抱いていた乱歩の融通無碍なありようにならって、広く大衆文化全般を研究するのが当初からの目標であった。

それこそが、さまざまな領域の研究者を擁する大学という組織の使命であり、さらに言えば大衆文化はわが立教大学の得意とする分野のひとつでもあるからである。今号の掲載論のラインアップからも、

広く大衆文化全般を対象とするという方向性はわかりただけだと思う。

「大衆文化」という名称は一見どこにでもあるようで、さほど例を見ない。一種の真空地帯のような名称だが、そのことは期せずして、大衆文化へのアプローチが必ずしも十分とは言えない今日の研究状況をも示唆してはいないだろうか。文化や大衆への研究のシフトが叫ばれて久しいが、それらの多くはともすれば瑣末や好事に陥り、以前とは違った意味で、依然として大衆や大衆文化は、われわれの手の届きにくいところにあるのではないか。

『大衆文化』はそうした閉塞状況に風穴をあけるべく企図された。大方のご支持とご支援のもとに号を重ねて行くことを願ってやまない。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター長

藤井淑禎